



「運動機能の獲得」 ～直立二足歩行と進化～

私は「人間教育革命、総合的人間科学との協働」の中で
「0歳からの人間教育」というテーマで私の考え方を書いたことがあります。
生みの親・育ての親の与えられた役割の中で
「子どもは 自らの五感を駆使しながら 学び・育つものと心得るべし」と書き伝えました。
なぜなら出生直後の新生児に備わっている機能は胎児期に学習した能力で、
この基本的能力をベースにして出生後に多くの学習を行い、
さまざまな認知機能を発達させていくのだ、と考えられるというのです。
（「脳科学から見る子どもの育ち」乾敏郎（ミネルヴァ書房））

「人類進化700万年前の物語」という本の中で
「私たちだけがなぜ生き残れたのか」という問いかけがありました。
ここ180年間の発掘調査で28種の骨が発見されましたが
今まで生きのびてきたのは30万年前からの ホモ・サピエンスだけだというのです。
著者チップ・ウィルターがとりわけ熱心に紹介するのは、
人間が未熟な状態で生まれてくることであります。
人類に特徴的な長い幼年時代は、生まれてすぐ立ち上がる動物などと較べて、
親子で過ごす時間は極めて長い。
教育や学習に膨大な時間と手間をかけることで、
より多様な環境、状況に臨機応変に対応できるようになったことが
生き残りのカギになったというのです。



笑ったかす一番 だっこされたかす一番 やさしくされたかす一番
遊んだかす一番 でかけたかす一番 チャレンジしたかす一番



E-mail doushinkai@doushinkai.jp URL <http://doushinkai.jp>



私はここで自分が歩んできた長い保育園人間教育の中で、
考えを改めなければならないと感じたことがあります。

それは胎生期28週で 見ること、聞くことと自分の顔をなでることなど、
体性感覚も身につけていると言われたからです。
そして生後すぐに視覚・聴覚は20～30%の機能を持たされて生まれてくるのだそうです。
そして生後 1年間の歩みを見つめた時、模倣活動 口を開ける、舌を出す、
まばたきをする、音声模倣などが発達しながら
首がすわる、寝返りがうてるなどの各種運動機能の獲得がされていくのです。

そしてハイハイやつかまり立ち、テラスの教室での学び、
そしてこれらの運動機能の獲得が養護(生命の保持と情緒の安定)につけ加えられ
「直立二足歩行と進化」が三本の柱に入るべきであると確信しました。
「二足歩行で長距離歩けるようになった」
「両手が空いて道具を作ることができるようになり、それによって脳が発達した」
また「石が投げられるようになった」など。(図解 ホモ・サピエンスの歴史人類研究会編)

確かに「直立二足歩行をした人類の中で、絶滅しなかったのはホモ・サピエンスだけだ」
という事実もあります。

生後1年以内で起こる各種運動機能の獲得と移動能力、そしてそれに伴う五感への刺激と
環境の変容に伴う新しい人間を育ててきたことを
認知神経科学の発達がエビデンス(科学的根拠)を実証してくれたのですから、
「幼児教育は3歳から始まる」などという前近代的教育観から脱皮した新しい考え方、
「0歳から始まる人間教育(保育)の創造」に取り組まなければなりません。
またこれは私の長い保育活動の中でも実証されており
この世界にいる私たちこそが認識しなければならない
重要課題であると確信いたしております。

改めて私たちは未成熟なまま人間として生まれた意味を考えた時、
身近な自然、身近な事象、多様な環境に対応できる知恵の獲得につなげてきたのだから
それらがほとんど失われてしまった今、
この社会で保育所保育は、どのような役割を持たされているのでしょうか。

新しい時代を迎える足音が聞こえてきます。
改めて私たちの果たすべき使命を考えるべき時代はきています！！

平成 29 年 8 月 吉日
社会福祉法人 童心会
理事長 中山 勲

